

## 馬のクッシング病について

荻伏診療所 野田 龍介

今回は蹄葉炎や牝馬の繁殖障害の原因になることがある「馬のクッシング病」についてお話します。少しわかりにくい部分もあるかもしれませんが最後までお付き合いをお願いします。

### 馬のクッシング病

人や馬を含めた動物において、副腎から放出されるコルチゾールというホルモンが身体の免疫や血糖値、血圧の調節など多くの役割を果たしています。コルチゾールの分泌は、下垂体（様々なホルモンを分泌合成する器官）から出てくる副腎皮質刺激ホルモン（ACTH）というホルモンによって促進されます（図1）。さらに馬においては脳内から分泌されるドーパミンというホルモンがACTHの分泌を抑制することで、コルチゾールが過剰に分泌ないように調節しています。

下垂体の機能異常により、副腎からコルチゾールが過剰に分泌され、多毛や皮下の出血、中心性肥満（四肢が細くなり、体幹部が太くなる体型）など特徴的な症状を示す病気をクッシング病といいます。馬のクッシング病は下垂体の中葉という部分の機能異常が原因と考えられており、下垂体中葉機能不全（PPID）という難しい名前でも呼ばれることもあります。

馬のクッシング病は主に高齢馬で発症し、症状は、無気力や活動性の低下、多毛症（図2）、蹄葉炎、体重減少、筋肉の萎縮、感染症の増加であり、進行した症例では多汗症、多飲多尿等も認められるようになります。またクッシング病により、子宮等の生殖器も感染しやすくなるため不受胎の要因になるとも言われています。



図2 クッシング病で多毛症を認めた例

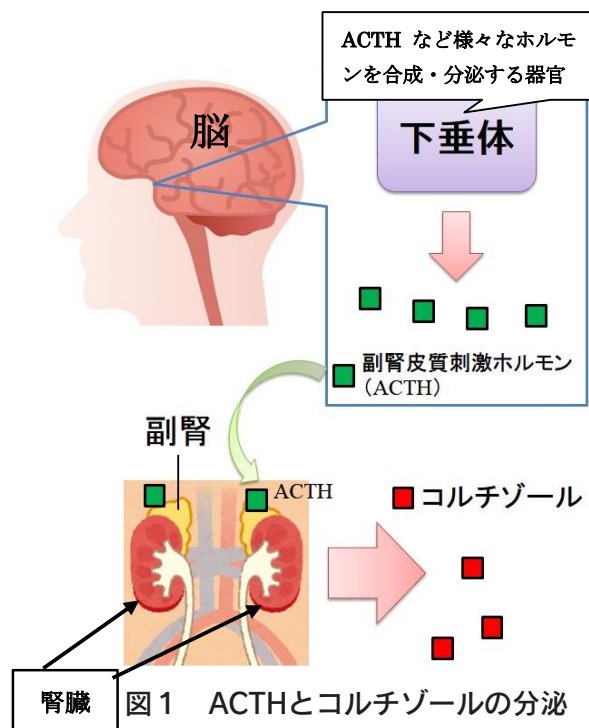


図1 ACTHとコルチゾールの分泌

### 診断

クッシング病を診断するには先に紹介した臨床症状の発見に合わせて、血液中のACTHやコルチゾールといったホルモン濃度を測定します。これらの検査でホルモン濃度が高値であればクッシング病を疑います。また、薬剤投与によりACTHやコルチゾールの数値の変化を評価する試験（糖負荷試験など）を実施する場合があります。これらのホルモン濃度は季節や飼いつけからの時間、強いストレスの有無によっても変化するため、獣医師とよく相談した上で採血のタイミングを決める必要があります。

### 治療

検査によりクッシング病を疑い治療する場合、脳からのドーパミン分泌を抑制するペルゴリドという薬の経口投与が推奨されています。効果を得るには2ヶ月間以上の長期投与が必要ですが、治療による罹患馬の症状緩和や受胎率の上昇も報告されています。

### おわりに

クッシング病は症状だけで判断することは難しく、その重症度も馬により様々です。

もし症状や経過でクッシング病を疑う馬がいれば、獣医師に相談して検査を実施してみたいかどうかでしょうか？

朝夕の気温差も出てきましたが、人馬ともに体調管理にはお気を付けください。